

原水爆禁止の科学者アピール支持署名についてのお願い

さる8日広島で開かれた第5回原水爆禁止世界大会で「科学者アピール」が採択されました。

11月の日本気象学会臨時総会でこのことが報告され、この「科学者アピール」を普及し、これに対する支持の署

名運動を展開することが必要であると考えられました。

皆様の御替同と御協力をお願いいたします。同封のハガキに御署名の上御送付下さい。

日本気象学会理事会

第5回原水爆禁止世界大会に集まった科学者のアピール

第5回原水爆禁止大会にさいし、この会議の成功に寄与するため、広島に集まったわれわれ科学者は、広範な討議を経て、大量破壊兵器の極度に発達した現在、局地戦争を含むすべての戦争を地上より永久になくすという課題が、全人類の解決せねばならない至上の任務であることを確認した。

われわれ科学者は、原子力兵器を禁止し原子戦争の可能性を根絶しようという運動が、今やすべての善意の人々によって支持され、年ごとに成長し、動かすべからざる世論となりつつある事実を深い喜びをもって評価するとともに、この運動のなかでわれわれの科学者に課せられた社会的責任の重大さを痛感せざるを得ない。このような観点から、われわれは科学的に明らかにされ、また明らかにされつつある放射能被害に関する次の諸点に対してとくに注目する必要があると考える。

(A) すでに多くの研究によって証明されているように核爆発実験による降灰の結果、大気、地表及び動植物の放射能汚染は急速に増加しつつあり、日本における調査の結果によれば、ストロンチウム90の地表蓄積は1955年以來、1平方キロメートルあたり毎年3～6ミリキュリーづつ累積し、1958年末には約15ミリキュリーに達し、また最近では玄米の中に400ストロンチウム単位(S・U)に及ぶ汚染も見出されている。どのような微量の放射線量といえども人体に有害な影響を与える一定の確率を有することはいうまでもない。いかに少線量といえども安全ではない。

(B) また水爆実験の結果、大気中の炭素14は最近5年間に10%増えている。この放射性物質は通常の炭素とともに人体に入りこみ、約5,600年にわたる半減期をもって放射線を出しつづける。炭素14は今後幾10世代にわたり遺伝的および身体的影響を人体に及ぼし続けるであろう。

なおこの他に、セシウム137、プルトニウム239、ヨード131などの核爆発生成物による障害も指摘されねばならない。

(C) 広島および長崎では、今日なお原爆症による死亡者があとをたない。広島における調査資料によれば、犠牲者は、直接被爆によるものだけではなく、中性子による誘導放射能と局地的降灰によるものもあるとみられている。

これらの事実は原子戦争の人類にもたらすであろう悲劇の一端をまざまざと示している。

(D) 最初の原爆(TNT爆薬2万トンの爆発力に相当する小型爆弾)でさえ、人口約40万の広島市民のうち20数万を殺りくした、と推定されている。その後相次ぐ原水爆実験による爆発エネルギーは、米英ソ合せてTNT1億8千万トンの爆発力に達するものと推定される。原水爆はますます強力なものとなり、その貯蔵量は急速に増大している。現在のミサイル技術の進歩からすれば、戦時においては、戦闘の開始後数時間以内に数千発の原水爆が人口の最も密集した地域に投下されることも考えられる。このように、核兵器が大量使用された場合の惨害は、人類の大半を滅ぼすのに十分である。

これらの推定が示すように、もし人類が原水爆を廃棄し、戦争そのものを根絶することに成功しないならば、人類はたえず滅亡の恐怖の下にかれらの生活をいとまねばならないであろう。

しかしながらわれわれは未来に対して希望をもってよい。核兵器を保有する三大国は即ち核実験を停止しており、核実験停止協定の実現に努力しつつある。一方核兵器が廃棄されれば原子力平和利用は大きく前進するであろう。

われわれは戦争と破壊を目的とした科学の研究には協力しないことを堅く誓う。われわれは世界にたいして科学がいかなる形においても人類の掟に反して使用されないように訴える。

1959年8月7日 広島において

ボーリング・坂田昌一・コヴァリヨフ・
ヴィジェ・以下26名

1959年12月